巨大壁画で笑顔広がれ　浄土平レストハウス　浪江から避難の高野さん制作。

＜福島民報新聞引用＞

＜2020 年 10 月 13 日(水)
大戸理事長が訪問・写真提供＞

浄土平の雪山を描いた高野さん。「見る人の記憶に残ってほしい」と願う

福島市の浄土平レストハウスに、巨大な壁画が完成した。浪江町で看板店を営み、現在はレストハウスで働く高野仁久（きみひさ）さん（５８）が手掛けた。東京電力福島第一原発事故で避難し、福島市に居を構えて九年余り。古里で磨いた看板制作の腕前を発揮する機会に巡り合えた。「絵には人の心を癒やす力がある。多くの人を笑顔にしたい」。前を向き、新たな一歩を踏み出す。

■「絵は人の心を癒す」

紅葉の季節を迎え、磐梯吾妻スカイラインから見える絶景を目当てに、平日は約二千人、休日には約四千人が浄土平を訪れる。施設二階の休憩室に飾られている縦一･八メートル、幅十一メートルの絵が、来訪者を迎える。「見た人の心に少しでも残ってもらえたら、こんなに幸せなことはない」。再び絵に関われる仕事に就けた喜びをかみしめる。高校卒業後、専門学校で美術を学び、看板店に就職した。三十歳で独立し、浪江町に高野看板を開業した。土木、建設、飲食店などあらゆる看板を制作してきた。主流のパソコンを使ったデザインを活用しつつ、ペンキと筆による手書きにこだわった。独特のタッチと色彩は話題を呼び、依頼も増えた。軌道に乗っていた商売は原発事故で一変した。古里を追われ、仕事は激減した。「区切りをつけるしかない」。浪江町の自宅を解体し、店の工場も閉鎖した。風景や家族の絵を描き、腕が鈍らないよう努めるのが精いっぱいだった。転機が訪れたのは昨年八月。学生時代から打ち込んできたボクシングで面識のあったレストハウス統括責任者の浅見宗一郎さん（４７）に誘われ、レストハウスで働き始めた。接客業務に当たる傍ら、美術スタッフとして椅子やメニュー表、自転車立てをデザインした。昨年の台風１９号や今年に入っての新型コロナウイルス感染拡大など県内観光業を取り巻く環境は厳しい。九月中旬、施設に飾る絵の制作を依頼され、「自分の技術を生かせるなら」と引き受けた。題材に選んだのは、春先に除雪で浄土平に訪れた際に目に飛び込んできた雪山だった。雄大な自然に触れ、生きる勇気をもらったように感じた。真っ青な空と気球も描いた。どんなに苦しい環境にあっても、前に進んでいくとの思いを込めた。夢中で描くうちに、心の奥にしまってあった熱い気持ちが湧き起こってきた。「震災と原発事故でつらい経験をしたが、あれからまもなく十年になる。過去を振り返るよりも、未来に向けて歩みたい」。今の率直な心境を口にした。＜福島民報新聞引用＞